

第 11 回 大賞(金の星賞)受賞作品

「うちゅう人からのてがみ」

茨城県 茨城高校3年 番場 絵理



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『うちゅう人からのてがみ』

茨城県 茨城高等学校三年

番場

絵理

ぼくは、あまねそう太。小学一年生。

とつぜんだけれど、ぼくにはうちゅう人の友だちがいる。友だちといっても、会ったことはない。一年前の今ごろ、ぼくがようちえん生の年長ぐみだった年のクリスマスあたりから、ぼくとうちゅう人との文づうがはじまった。ぼくたちが友だちになってから、ちょうど一年。そして、大きらいな川さきゆうとがとなり町に引っこしてから、一年がたつ。

きょ年。ようちえんのげんかんへとつづくなみき道が、こがね色のいちゅうでいろどられていたころ。ぼくたちのようちえんで、あるうわさがながれはじめた。

ぼくたちの町に、うちゅう人がいる。

それだけでもびっくりなのに、うちゅう人はひとのすがたにへんしんして、ぼくたちのことばをぺらぺらとしゃべれるらしく、ぼくたちの中にこっさりまぎれこんでいるのだと。

「そう太、おれたちでさがしにいこうぜ。」

ゆうとはうちゅう人のうわさにまっ先に食いついた。元からこうき心おうせいだったし、まほうつかいやドラキュラ、ふしぎなものがすきな男の子だった。

「いいよ。いこう。」

ぼくもうちゅう人にはきょうみがあった。それにうわさがもしうそだとしても、元気で明るいゆうととあそぶのは大すきだったし、うちゅう人が本当にいて、出会えたなら友だちになってみたいと思った。

「でも、どうやってさがすの?」

「どうやって、って?」

「だってうちゅう人はひとのすがたをしているし、にほんごをしゃべるんだよ。どこにいるかもわからないのに…。」



「んー、かん？」

ゆうとはみぎてのおやゆびをぐっと立てて、にかっとわらった。

それから、ぼくたちはようちえんがおわったあとに、うちゅう人をさがしにちょうないをはしりまわる日々が近づいた。いつもいくこうえん、小さいころおかさんとよくいったとしょかん、こどもずきのおまわりさんがいるこうばん、いつもいねむりをしているかわぐちさんのだがしやさん、おかあさんいきつけのスーパーにコンビニ、小学校のたいいくかんうら……。

「やっぱりかんたんには見つからないな。」

ゆうとがジャングルジムのてっぺんにすわって空を見上げながらつぶやいた。その日もしゅうかくなし。空気はひえて、空のすんだ青はどこまでもとぎれない。もうすぐ冬だ。

「そうだ、こんどおれのいえでクリスマス会やろうぜ。」

「どうしたの、きゆうに。」

「ふゆやすみにはいったらようちえんいなくてひまじゃん。おれ、そういうパーティーまえからあこがれてたんだよね。」

ゆうとが少してれくさそうにわらった。

「じゃあプレゼントこうかんしようよ。」

「お、いいね！」

ぼくたちはジャングルジムからおりると、とおくの空の夕ぐれにおいつかないように早足で家へとむかった。

「そう太、タイムカプセルってしててる？」

「タイムカプセル？」

「うん、だからものや、みらいのじぶんへのてがみをいれてじめんとうめるやつ。なんねんかしたらほりおこすんだって。ねえちゃんよりふたつとしいえのともだちがいま小学六年生で、そつぎょうきねんにうめるんだってさ。」

「へえ、おもしろそうだね。」

「おれたちもやらない？ で、ふつうのじゃつまらないから、そう太は一年ごのおれに、おれは一年ごのそう太にてがみをかくってどうかな？ クリスマス会のとくに、かいたてがみをうめようぜ。」

「それすぐわくわくする！ やろうやろう！」



ぼくがわらってふとぜんぼうの空を見上げたとき、七色に光るものが空を  
おりていった。

もしかして…あれって……

「UFO!？」

ぼくとゆうとが同時にさげんだ。ぼくたちは少しおどろきながら目を合わ  
せてくすくすとわらった。そしてもういちど空を見上げるとUFOはきえて  
いた。

その日による、ぼくはみらいのゆうとへてがみをかいた。

「一年このゆうとへ。こんにちは。そう太です。うちゆう人はけっきよくみ  
つからなかったけど、ゆうととのうちゆう人さがし、とつてもたのしかった  
よ。ぼくが、さいしょともだちがいなくてひとりであそんでいたとき、ゆう  
とがこえをかけてくれてとてもうれしかった。きょうみたUFOにのって  
いるうちゆう人がゆうとみたいなのやさしいこだったらいいなあ。これからもよ  
ろしくね。そう太より。」

まんまるのおつきさまが、そつと、まどから家の中をてらしていた。

「きのうみたあれ、やっぱりUFOじゃないよ。」

つぎの日、ようちえんでかおをあわせてすぐ、ゆうとがぎんねんそうに言  
った。

「え、だって、ゆうとだって見たでしょ。」

きのうの空とぶぶつたいは、ぜつたいにUFOだ。しょうこはないけれど、  
かくしんがあった。ゆうとと見つけた、きれいなUFO。

「おれもほんとはしんじたいよ。でも、ねえちゃんがあんたばかじゃないの、  
UFOなんてあるわけないでしょ、あんたが見たのはひこうきよ、って。ち  
よつととおくにひこうじょうがあるらしくてさ。それきいたらみようになっ  
とくしちやって。」

「ひこうきって七色にひかるの?」

「それは知らないけど、きつとたいようのひかりが…」

「でも、あれぜつたいUFOだよ。ゆうと、まほうつかいとがすきでしょ。  
だったら…」

「うん、すき。でも、やっぱりげんじつにはいないんじゃないかな。」



「うちゅう人も？」

「うん、はつきりとはいえないけど。」

ぼくはなんだかむしゃくしゃして、そのばかりはしつてにげてしまった。うしろからゆうとがぼくをよぶこえがきこえたけど、むしした。

ぜっこうだ。ゆうとなんか、きらいだ。大きらいだ。しんじてたのに。ぼくはうちゅう人がいるってしんじてたし、ゆうともそうだと思ってた。なの  
にゆうとは……。

それいらい、ぼくはゆうとはなさなくなった。さいしょはゆうともぼくにいつもどおりはなしかけていたけれど、ぼくはゆうとをむししつづけたから、やがてゆうとからもこえをかけられなくなり、そのままふゆやすみにはいった。家の中ですごすまい日。こたつがあったからさむくはなかったけれど、すきま風がふいているみたいに、むねのまん中あたりがなぜだかひえていた。

クリスマスの日 came。ゆうとからでんわもなく、ぼくもでんわしなかったから、クリスマス会のよていはしぜんしょうめつした。れんらくをとったところで、クリスマス会はできない。ゆうとへのクリスマスプレゼントをかっていなかったし、一年ごのゆうとにあてたてがみは、ぜっこうするときめた日によるにびりびりにやぶいてふうとうに入れて、かぎつきの引き出しにふういんしてしまったから。

それからすうじつだったところ、ぼくあてにうちゅう人からてがみがきた。たどたどしいにほんごで、たまにひらがなが左右ぎやくになっていたりしたけれど、心のこもったすてきなものだった。さしだし人のらんは「うちゅう人より」とあるだけで、じゅうしょはかかれていなかったけれど、へんじをかいてぼくの家のポストに入れたら、つぎの日のあさにはなくなっていた。はじめは、だれかのいたずらだと思った。でも、てがみのやりとりをするごとにその思いはきえていった。ぼくたちはいろいろななをしをした。ようちえんにつたわるでんせつのこと、先生のこと、友だちのこと、かぞくのこと、テレビのこと……。わだいはつきることなく、てがみがきているかかくにんするためポストをのぞくのがたのしみになった。

やがてふゆやすみがおわり、三がつきになった。ぼくはゆうととなかなかおりして、うちゅう人のことをはやくはなしたくてうずうずしていた。はじめ



は、ほらやっぱりうちゅう人はいるんだよ、といってやるつもりだったけれど、だんだんすなおにゆうとにもうちゅう人となかよくなってもらえたら、と思うようになったからだ。

ところが、かんじんのゆうとはようちえんにこなかった。先生が、ゆうとくんはおとうさんのおしごとのつごうでとなり町におひっこしました。みんな、あとでてがみをかこうね。といった。ぼくはしんじなかった。

ひっこし？ うそだ。

ぼくの思いとはうらはらに、ゆうとはようちえんにこなかった。つぎの日も、そのつぎの日も、そのつぎの日のつぎの日も、つぎの日のつぎの日のつぎの日も……。

ゆうとがひっこしをしたとした日からしばらくして、クラスのみんなでゆうとへてがみをかいた。

みんな、ゆうととそんなになかよくなかった子も、そこそこながいてがみをかいていた。ゆうととなかよしかったぼくといえは、へゆうとへくとかいたきり、えんぴつがすすまなかった。

先生が、

「ひとことだけでもいいよ。」

と言ったから、へ大きらいくとかだけかいていしゆつしたら、やすみじかに先生になだめられて、もう一回かきなおしなさいと言われた。しかたがないからへ大きらいくをけてへげんきでねとかいてもう一回ていしゆつした。先生はなにも言わなかったから、それでゆうとのもとへとどいたのだらう。

あれいらい、ゆうとのことをかんがえることが少なくなった。小学生になってからはあたらしい友だちもたくさんできたし、うちゅう人へのてがみをかいたり、うちゅう人からのてがみをよんだりするいがいは、学校の友だちとほとんどあそんでいた。

クリスマスがちかくなかったころ、うちゅう人からいつもとちがうふんいきのてがみかとどいた。

へそう太くんへ。きみのむかしの友だちからてがみをあずかっているの、どうふうします。うちゅう人よりく。



ふうとうの中には、少し小さめのふうとうが入っていて、表には「へいちねんごのそう太へ」と書かれていた。むねがどきつとした。うらを見ると、「川さきゆうと」と名前。むねのどきどきをおさえながら、ふうをあげる。

「へいちねんごのそう太へ。こんにちは。うちゅう人のうわさがあったから、まちをさがしまわったけどみつけれなくてざんねんだったな。でもそう太とおもいきりはしりまわって、あせいっぱいかいて、ぼうけんしているみたいでおもしろかった。まえ、おれがべんとうわすれたときおかずをわけてくれてありがとう。おいしかった。らいねんも、もういつかいうちゅう人さがししようぜ。うちゅう人みつけて、ともだちになったら、三人でいっしょにごはんたべようよ。ちきゅうのおいしいごはんをうちゅう人におしえてあげるんだ。たのしそうだろ? じゃあな。ゆうとより。」

ぼくはなんどもなんどもてがみをよんだ。今ゆうとがちかくにいないことがさびしくて、一年前の自分がなさけなくてはずかしくて、でもむねのまん中に春の風がふいたみたいにあたたかくて、ぽかぽかして、ないた。こえを出して、ようちえん生みたいにわんわんないた。

しばらくして、ぼくはふういんした引き出しをあけて、本当なら今ごろゆうとがよんでいるはずのてがみをひっぱりだした。ふうとうをあけると、びりびりにやぶったてがみはまほうでなおしたように一まいのかみにもどっていて……なんてことはなく、あの日のまますっかりとびりびりにやぶられたまま。それを見ると心がいたんでまたなみだが出てきたけれど、つくえの上にはセロテープをよういして、一まい一まいのかみきれを、ジグソーパズルのようにはり合わせていった。つぎはぎだらけのてがみになってしまったけれど、ていねいに、心をこめてなおした。

ぼくはそのがみ一まいだけをふうとうに入れて、ポストに入れた。夕はんを食べた後、おふろに入ってはみがきをして、おやのきよかをもらって、にわに出た。ポストの中をかくにん。まだてがみはあった。木のかげにみがかくして、もうすぐあらわれるであろううちゅう人をまった。

まん月が空のてっぺんにのぼったころ、うちゅう人はやって来た。うちゅう人はうちゅう人らしくUFOののってやって来ればいいのに、じてん車をこいできた。はなうたまじりに、白いいきを花のように空気中にさかせながら、ぼくの家までやって来たうちゅう人。ぼくと同じ、おそらく小学一年生。



うちゅう人がポストからてがみをとり出してじてん車にまたがったとき、ぼくは木のかけからとび出して声をかけた。

「ゆうと。」

とつぜんのよびかけに、うちゅう人は明らかにびっくりしたようすでじてん車をたおしてしまった。

「そう太、これは、その……わるぎがあったわけじゃなくて、ほんとなんだ、だまそうとしたんじゃないかって……ごめん。うちゅう人はおれだったっていうか、いや、おれはうちゅう人じゃないんだけど……。」

あたふたするうちゅう人を見てぼくはついふき出してしまった。うちゅう人もつられて笑って、言った。

「こうえん、行かない？」

「夜なのに？」

「夜だから、だよ。」

うちゅう人は右手の親ゆびをぐっと立てて、にかっとわらった。

じてん車をおしながら歩くうちゅう人と、となりを歩くぼくを、まん月はやさしい光でてらしながら見まもってくれていた。

「今夜は星、見えないな。いつもは見えるのに。」

「うん、まん月だからね。」

ぼくはこたえて、よく目でうちゅう人をぬすみ見た。しばらく見ない間に、ずいぶんせがのびたようだ。むかしは同じくらいだったけれど、今はゆうとの方がちょっと大きい。

「ゆうと。」

「うん？」

「ごめんね。ようちえん生るとき、ぼく、ゆうとにひどいことした。」

「いいよ、気にしてないからさ。」

「よくないよ。ぜんぜんよくない。ゆうとはもっとおこっていいはずだよ。」

ぼく、「

だから、そう太……」

「ぼく、ゆうとのことかってにクライになって、むししつづけて、それで、

「いいったら、

「ゆうと、ほんとに……」





「それいじょう言ったら本当におこるぞ。」

なみだ目になったぼくに、ゆうとはわらいながらなぐるマネをした。  
「むかしのことだろ。おれら、おたがいにお子ちゃまだったしさ。ま、今も  
ばりばり子どもだけどな。」

ゆうとは大きく口をあけてわらった。ゆうとは、やっぱり……

「うちゆう人、いたんだよ。」

「え?」

「いるんだよ、うちゆう人。」

「いや、だから今までのてがみはずっとおれが……、」

「ゆうと、きみがうちゆう人だったんだ。」

ゆうとはあゆみをとめてぼかんとしたかおでぼくを見つめる。ぼくはわら  
って、

「ぼくが友だちになりたかったうちゆう人は、やさしい子だったんだ。ゆう  
とだったんだ。」

「じっかし、ほんとてがみびりっびりだな。」

ジャングルジムのてっぺんで、月明かりをたよりにてがみをよむうちゆう  
人はしじゅうわらっていた。ぼくもわらってへんじをする。

「ほんと、ごめん。」

「しかもこんなこっばずかしいないよう、よく書けたな。よむこっちもてれ  
るよ。」

「ゆうとからのてがみだってそんなもんだったよ。耳がくすぐったくなっ  
た。」

「うわ、はずかしいな。」

「かわってないね、ぼくたち。」

「そうだな、一年ぶりに会ったのに、しぜんにしゃべれてる。」

「会ってはなかったけれど文つうしてたからね。」

「でも、まさか文つうのあいてがおれだと思わなかったでしょ。うちゆう人、  
しんじてただろ?」

「うん、ゆうとにはしてやられたよ。毎回じてん車でこっちの町まで来るの、  
たいへんだったでしょう。」



「うん、それなりに。でもたのしかったからけっかオーライかな。」

「それに、ぼく、今もうちゅう人しんじてるし。思ったとおり、ぼくが文つうしてたのはうちゅう人だったし。」

「まあ、な。うちゅう人がおれでよかったよ。ほんと。」

「自分で言うなよ。」

二人で声を上げてわらった。あたたかい。ジャングルジムのまわりだけ、春みたいだ。

「ありがとう。」

ぼくの家について、うちゅう人におれいを言った。

「そう太、こんどあそぼうな。」

「うん。こんどはぼくが会いに行くから。」

「おう。まってる。」

ふと、ぼくたちは空を見上げた。月明かりで星は見えにくかったけれど、ひとすじの青白い光がまよなかの空にせんを引いた。

「あ、UFOがむかえに来た。」

ゆうとがわらって手をふった。

「またな。おやすみ、そう太。」

「うん。なかまのうちゅう人に、よろしくね。」

いつまでもじめんからとび立とうとしないじてん車にのったうちゅう人の友だちを、ぼくはそのすがたが見えなくなるまで手をふって見おくった。